

## 実習関係の著述に対する頭辞

東京国際工科専門職大学は、専門職大学として地域共創デザイン実習や臨地実務実習を行っております。卒業までに延 600 時間に及ぶ実習では、学生が多方面で活躍し、その成果が企業からも評価されています。

本年は、その成果に関する 5 件の寄稿があり、掲載することとなりました。

“LinearSVC による機械音異常検知”では、機械音異常検知の実運用を想定し、僅かに得られた異常時の音響データを活用した機械学習の教師ありモデルを構築することにより、F1 スコア 0.95 という高い評価値を実現しました。

“シビックプライド醸成に繋がる住民価値の掘り起こしと貢献度の検証に関する研究”では、ある自治体様でのシビックプライド醸成という課題に対して、自治体住民に対して行ったアンケート結果に、多変量解析や機械学習を用いて、潜在的な住民意識の見える化を実現いたしました。

他 3 件は、いずれもデジタルツインに関する寄稿です。“デジタルツインを用いた騒音問題の解決についての一考察”、“デジタルツインを用いた飲食店の混雑についての一考察”、“デジタルツインを用いた選挙の投票率を上げるための試みについての一考察”では各々、「部屋内外からの音漏れによる騒音問題」、「新宿における昼食難民問題」、「日本の若年層の低投票率問題」、という具体的な課題を設定し、その解決策を、現地での聞き込み、アンケート結果等を基に、デジタルツインで課題の見える化を行い、課題解決へ向けての具体的なプロトタイプ的设计を行っています。

これら 5 件に共通していることは、社会で実際に起きている具体的な課題に対して、大学の講義で習得した技術を、逆に大学の講義だけでは得られない生のデータに対して適用し、課題の見える化や具体的な解決に向けたプロトタイプ的设计を行っている、という点です。本学における実習は 2 年生から 4 年生の間に計 6 回ありますが、このように、講義と実習を繰り返して行うことにより、講義で習得した技術を、机上の空論で終わらせず、「生の」データに適用することにより、学生の理解が深まるだけでなく、社会的にも有用なソリューションの提供が可能になります。本学は開校してまだ 3 年半であり、実習の成果は、先輩から後輩へも引き継がれていきますので、今後のさらなる実習の成果に、ご期待いただきたく存じます。

実習運営会議長 上條浩一